

コオニユリ

小鬼百合こおにゆり ユリ科

ユリの花の見えない苦勞

アゲハチヨウは赤い色を識別することができる。だから、アゲハチヨウを呼び寄せる花は赤系統の色をしている。

鳥や動物にとって、赤はもつとも目を引く色である。人間の注意を引きつける必要がある「止まれ」の信号も赤色である。鳥や動物に種子を運んでもらう果実も多くは赤く染まって、彼らを引きつける。果実はまだ熟す前は緑色をしている。やがて、種子が熟すと果実は赤くなって食べどきだという信号を送り、鳥や動物たちを呼び寄せてその実を食べさせるのである。果肉と一緒にお腹に入った種子は消化器官を通り、排泄されて散布されるのだ。

かつてサルだった私たち人間が、赤く実った果実をおいしそうと感じるのは、それが植物と築き上げてきた約束事だからである。その本能を利用してか、ハンバーガーや牛丼のチェーン店、中華料理店も食欲をそそる赤色や朱色を基調にデザインされている。里に咲くコオニユリもアゲハチヨウを呼び寄せる朱色をしている。ユリの仲間はどう



も花が大きく立派だが、それは花粉媒介者である大型のチョウやガにサイズを合わせているからである。

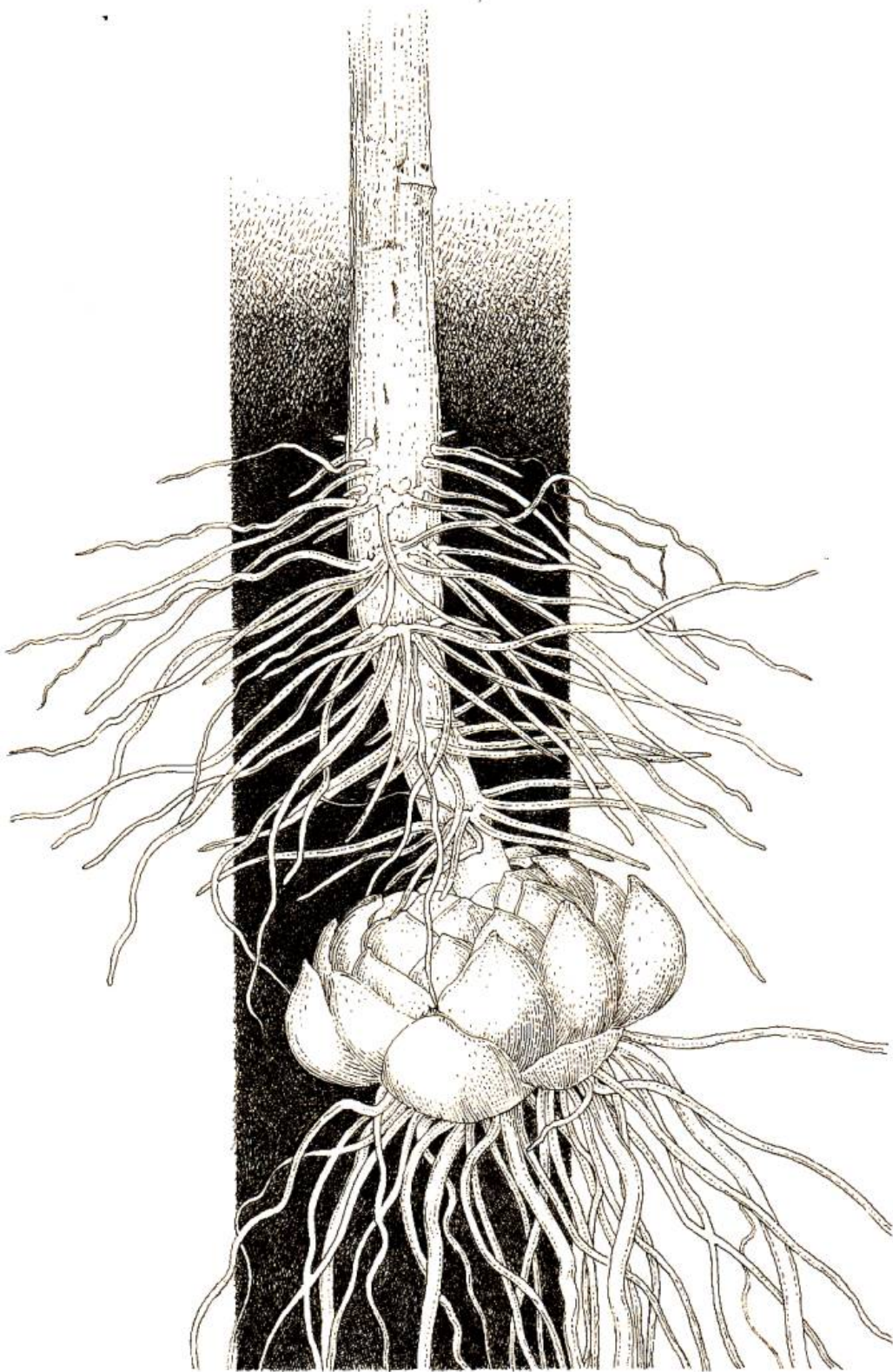
チョウは美しく華やかなので、ずいぶんいい印象を持たれているが、花にしてみれば質たちの悪い大盗賊である。チョウはストローのような長い口を持っているので、雄しべや雌しべに触れることなく蜜を盗み吸うことができるのだ。これでは受粉することができない。だから、ガラの悪い大盗賊に花粉を運ばせることを選んだコオニユリの花は手が込んでいる。

花はわざと下向きに咲いて蜜を吸いにくくして、さらに雄しべや雌しべを長く突き出している。訪れたアゲハチョウは雄しべや雌しべを足場にしてぶら下がり、羽をばたつかせながら苦勞して蜜を吸わなければならぬ。そして、夢中で蜜を吸っているあいだに体が花粉だらけになってしまふのである。意地の悪いいやがらせにも見えるが、こうでもしないと蜜泥棒のチョウに蜜だけ持っていかれてしまふのだ。

コオニユリは雄しべにも工夫がある。雄しべの先はT字形の構造になっていて、花粉の入った葯やくが自在に動くようになっていて、そして掃除モップの先のように、どんな角度でもチョウの体にぴったりとフィットできるようになっているのである。

そのうえ花粉には粘り気があって、チョウの体につきやすくなっている。ユリの花粉

④



が私たちの衣服につくと、取れにくいのはそのためである。一方、雌しべの先からは粘液が出ていて、花粉を受け取りやすくなっている。花瓶に活けた園芸用のユリも、よく見るとこの粘液をしたたらせているのが観察できる。

しかし、コオニユリが手を焼いているのは蜜泥棒のチョウだけではない。球根を狙う泥棒もいるのである。ユリ類の球根はでんぷん質が豊富である。はるか昔、重要なでんぷん源は「ウリ (Uli)」に由来する発音であらわされた。うるち米、くり、くるみなどの古来からの食糧が「ウリ (Uli)」「ウル (Uru)」の発音を含んでいるのもそのためである。同じ発音を持つユリ (Yuri) もかつては重要なでんぷん源だったと考えられている。ましてやコオニユリの球根はえぐ味も少なく味がいい。このおいしくて、栄養豊富な球根を猪などが狙っているのだ。これは蜜泥棒どころの騒ぎではない。球根を奪われては命にかかわる。

しかし、コオニユリも負けてはいない。球根を守るため命がけの作戦を執行するのだ。ユリの球根には、球根の下側から出る下根かこんと、球根より上の茎から出る上根じょうこんとがある。主に水や養分を吸収するのは茎から生える上根である。下根は別名を牽引根けんいんこんという。根が地中深く張った後、縮んで球根を土の中に引っ張り込む。そうして、容易に掘られないように球根を地中深く潜伏させていくのである。

⑥

さらに、コオニユリの作戦は続く。ふつうの植物は球根から上に向かって芽が伸びる。しかし、コオニユリは違う。球根から出た芽は一度横に伸びる。そして、球根から少し離れた場所で地上にあらわれるのである。毎年毎年、横へ伸びながらコオニユリは芽を出す場所をずらしていく。こうして球根の位置がわからないようにカモフラージュ作戦をとっているのである。

それでも掘り当てられたらどうするか。これはもう自爆するしかない。ユリは漢字で「百合ゆり」と書くが、これはユリの球根がたくさんりんべんの鱗片が合わさっていることによる。万が一、球根が食べられそうになったとき、ユリの球根は細かな鱗片に分解されるようになっていいる。そして、形を失ってバラバラと崩れ落ちてしまうのだ。丸々と太った球根をねらった動物も、バラバラに散らばった鱗片をすべて食べ尽くすことはできない。難が去った後、残った鱗片はやがて根を出し、新しい球根をそこに形成するのである。「湖に浮かぶ白鳥は人知れず水をかく」という言葉がある。気高く美しいユリの花も白鳥に共感していることだろう。優雅に見えていても、いや優雅に見せているからこそ、見えないところでは大変な努力をしているのだ。

コオニユリ *Lilium leichtlinii* var. *tigrinum* (ユリ科 ユリ属)

コオニユリは全国の湿原の周辺地域や湿った草原に生育する多年生草本。夏に美しいオレンジ色の花を咲かせる。オニユリによく似ているが、湿地の周辺に生育することと、むかごを作らない点、茎に顕著な毛がないことで区別できる。地下には白い鱗茎があり、食べられる。花はよく結実し、中には翼のある種子が入っており、風によって散布される。

コオニユリは湿原の周辺に咲く花としては派手なもので、良く目立つ。この花が咲くと写真愛好家の絶好のターゲットになってしまい、1日にして周辺が踏み荒らされてしまうことが多い。写真撮影が中心になり、植物そのものが採取されなくなった事は好ましいのであるが、誰か一人が我慢できずに立ち入ってしまうと、後から後から新たな立ち入りが続ぎ、花が終わるまで泥沼になってしまう。

因みに、コオニユリなどの球根を作るユリの仲間は採取して庭などに植えると、数年はどうか生育しているが、3年目頃から消失してしまうことが多い。食べられてしまうのであろうか。野にあってこそその美しさであり、栽培植物と比べると負けてしまう。野に生えたままで観てやりたいものである。



花の特徴

茎先に総状花序（柄のある花が花茎に均等につく）を出し、黄赤色の花を下向きに2～10輪くらいつける。花被片は6枚あり、披針形で上部がそり返る。花被片の内側には黒紫色の斑が散りばめたように入る。

葉の特徴

葉は線状の披針形で、互い違いに生える（互生）。葉の先は鋭く尖り、つけ根の部分はくさび形である。葉脈は並行脈である。葉には柄はなく、茎を抱く。

実の特徴

花の後にできる実はさく果（熟すると下部が裂け、種子が散布される果実）である。

この花について

—

その他

近縁種のオニユリ（鬼百合）は中国から渡来したのと考えられている。両者の違いは、本種のほうが花が小さく、珠芽（むかご）がつかないことで区別できる。属名の *Lilium* はギリシャ語の「leirion（白）」からきている。マドンナリリーの白い花を念頭に名づけられたものである。変種名の *tigrinum* は「虎のような斑紋のある」という意味である。



[すもと、1985.7.14]



[2002.7.17]



[さいばい、2001.7.16]



[さいばい、2001.7.16]



[2001.7.20]

- ふつうしゅしはできません(チューリップ、ヒガンバナとおなじです)。
- むかごでふえます。
- よくにたコオニユリは.....
 - むかごがつかない。
 - くぎにしかっしょくのはんてんがつかない。
 - かべんがそりかえらない。



[オニユリのむかご、あいおいし、2003.6.22]



コオニユリ<小鬼百合> ムクロギ科 ムクロギ属 *Lilium leichtlinii* var. *maximowiczii*

山地の草原に見られる多年草。高さ1 m程度。夏に開花。花はオニユリに似ているが、葉腋にムカゴがつかない。

分布 北海道～九州

花期 7～9月

撮影 千葉県成東町 05. 7. 24、久住野の花の郷 02. 8. 4、伊豆半島 06.

9. 2



コオニユリ

こおにゆり No.894



名 前 コオニユリ(小鬼百合)
別 名 赤平戸
科 名 ユリ科
学 名 *Lilium leichtlinii* var. *maximowiczii*
花 期 7月～9月
草 丈 1-1.5m
生育地 山地の草原
仲間 キヒラト、オニユリ
その他
撮影地 長野県下伊那郡売木村
メモ

オニユリに似ているが葉も細め、花も小型です。オニユリとの違いは葉のつけ根にむかご(珠芽)ができないことです。また、よく結実します。





オニユリの花とむかご